

《2010年4月例会報告》

【日時】2010年4月9日（金）19:00～21:00（その後「ルン」～23:50）

【会場】筑波大学附属高校3F会議室（東京都文京区大塚1-9-1）

【テーマ】7人制ラグビーの現状と今後

【報告者】村田互（ヤマハ発動機スポーツ振興財団／JRFU）

【参加者（会員）11名】阿部博一（日本サッカー史研究会） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）
岸卓巨（中央大学大学院） 国島栄市（ビバ！サッカー研究会） 小池正通（杉並アヤックス） 嶋
崎雅規（帝京高校） 鈴木崇正（NECデザイン&プロモーション） 高田勝敏（元（財）東京都サ
ッカー協会職員／元ベルリンサッカー協会研修生） 高田敏志（町田高ヶ坂SCコーチ） 高橋義
雄（筑波大学大学院） 中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（未会員）1名】村田互（ヤマハ発動機スポーツ振興財団／JRFU）

【ルンからの参加者】田中理恵

【報告書作成】岸卓巨

7人制ラグビーの現状と今後

村田互（ヤマハ発動機スポーツ振興財団／JRFU）

<コーディネーター挨拶>

高橋義雄：コーディネーター役を務めます筑波大学の高橋です。村田さんは、私の筑波大学社会人大学院にマスターの2年生として在籍されており、その縁もありまして今回お願いしました。先日のシンポジウムでは、ハイパフォーマンス・マネージャーの岩淵さんから、15人制ラグビーについての話があったので、7人制ラグビーについても考えてみようということで村田さんをお願いしたところ快く引き受けてくださいました。

皆さんご存知の通り、2016年のリオのオリンピックから、7人制ラグビーは正式種目ということで、男子だけでなく女子も加わりました。日本人はオリンピック好きですから、オリンピック種目として非常に盛り上がるのではないかと思います。一方で、現状の7人制は全く知られていない。しかし、村田さんと大学院で話をしていると、90年代に日本でも7人制の大会が行われていた時代があったそうで、その頃は女子大生にもとても人気があったそうです。今は、サッカーでも有名なYC&AC（横浜カントリー&アスレチッククラブ）で毎年セブンズの大会が開かれ、ちょうど先週行われました。筑波大学からもセブンズのチームが出場していました。

今日は、セブンズの現状と、セブンズがオリンピック種目になって6年後のオリンピックで勝ち抜くための課題を、現代表監督としてどう見るのか、どのように解決していくのかという話を紹介していただければと思います。現状として、日本ラグビー協会ではセブンズと女子に関しては、委員会を立ち上げて組織づくりが動き出していますし、IRB（国際ラグビーボード）ではセブンズの子選トーナメントを国際的に行おうという動きが既に始まっているようです。IRBとしては、これが1つの商業イベントとして成り立つのではないかと戦略が出ているようなことも聞いています。そのあたりを含め、村田さんお願いいたします。

<プレゼンテーション>

■自己紹介

村田 互：はじめまして。ただいまご紹介いただきました村田 互と申します。簡単に自己紹介からさせていただきます。私は、1968年に福岡で生まれました。現在42歳です。小学校1年生からラグビーを始めまして、中学では部活でもラグビーをしていました。高校は、今年の高校ラグビー大会でも優勝した東福岡高校出身です。東福岡高校では、当時僕は159cmだったんですが、僕が2年生の時に花園に初出場した時代でもあります。その時は、部員は50名くらいいたんですが、そのうちの8～9割が素人の軍団で、10人くらい経験者が入っているという状態でした。

そこから専修大学に入学しまして、レギュラーになったのは3年生からです。1～2年生の時は、まだ体が大きくなかったのでなかなか試合に出る機会がなかったのですが、身長も大学に入って5cmほど伸びまして、3年生からようやく活躍して、大学を卒業する頃には、日本代表の次の位置にあたる日本選抜というチームに入りました。そこから、現東芝ブレイブルーパス、当時は東芝府中ラグビー部に入り、当時アマチュアだったので8～17時までは仕事、18時から20時過ぎまで練習という生活をしていました。

転機となるのは1999年です。それまでに1991年、1995年、1999年と3大会連続でワールドカップに出場させていただきました。1995年の第3回ワールドカップは、「インビクタス」という映画で取り上げられた南アフリカで行われまして、その時に日本はニュージーランドに17対145という歴史的な大敗を喫しました。その時の9番が、実は私だったわけです。キャップと言って日本代表の試合に1試合出場すると1つキャップがもらえるんですが、そのニュージーランド戦で私のキャップはわずか4つ目でした。ただし、その4つ目のニュージーランド戦からは約5年間にわたって日本代表のレギュラーを守りました。

1999年の時に、東芝も日本選手権を3連覇していましたので、そこから新たな挑戦ということで、フランスのプロラグビーチームに日本人として初めて移籍することになりました。それで、フランスで2シーズン終えた後、再度日本のヤマハ発動機に戻ってきまして、そこで7年間プレーしました。関西社会人では優勝して、トップリーグでは最高位が2位、マイクロソフトカップという大会でも準優勝まで登りつめました。トップリーグで優勝することはできませんでした。そして、2008年の2月に40歳を迎えまして、最終戦では古巣の東芝と試合をして、その後引退式を行ったという経緯があります。

私としては、そのまま1年間くらいゆっくりしようかなと思ったのですが、現役時代も2年間、7人制のコーチをやっけていまして、引退した直後に、来期は監督をやってくれと言われてまして、現在監督を丸々2年行ったところです。

以上、簡単ですが、自己紹介とさせていただきます。

■7人制ラグビーの現状と今後

これから7人制のことを話していきたいと思いますが、まずは7人制の試合を実際に生で見たことある方いらっしゃいますか？ 3人しかいらっしゃいませんね。グラウンドは一緒なんです。まったくグラウンドは同じところで、7対7で試合を行います。

セブンズにもワールドカップがあります。2009年の3月にドバイで行われたワールドカップには出たのですが、4戦全敗で終了しました。昨年の東アジア大会では、お陰様で金メダルを取らせていただいたのですが、アジアでは日本がNo.1に君臨しております。

今年の目標は、2010年に広州で行われるアジア大会で金メダルを取ることです。ただし、メンバー編成がとても難しいです。なぜなら、例えば昨年の東アジア大会は12月の第1週に行われたのですが、トップリーグと日程が重なっていました。ですので、どの程度選手を呼べるか。本来なら協

会を通して選手選考をさせていただくのが早いのですが、協会とセブンズと15人制の三角形のリンクがなくてなかったので、呼びたい選手がなかなか呼べない状態でした。昨年の東アジア選手権で優勝したメンバーの半分以上は、自分のチームでレギュラーでない選手でした。レギュラーだったのは2〜3人しかいませんでした。

東アジア大会では国籍が問われますので、外国人選手は基本的には使えないということになります。ただし、ワールドカップは外国人選手を使うことができます。これも15人制同様、条件がありまして、日本に3年以上滞在して、日本のチームで活動した選手のみ、日本代表として出場することができます。ですので、15人制には外国人選手が、おそらく7〜8人います。実際に日本代表の15人制の試合を見ても、ほとんど活躍するのは外国人選手なので、本当にこれでいいのかということに、去年の10月にオリンピック種目に7人制が加えられた。こちらはオリンピックなので、当然国籍が問われます。よって、これからは日本人中心で選手を選考していかなければいけないし、6年後にリオでは行われるオリンピックや9年後の日本で行われる15人制のワールドカップに向けて強化していかなければいけない。9年後のワールドカップの時には、果たして今のように外国人選手がいるのか、それとも日本人中心で日本人監督で、外国人選手2〜3人というチームでやっているのかは、先日のシンポジウムで岩淵さんから聞かれたのではないかと思いますので、私は話さないようにします。

セブンズはファミリーです。と言いますのも、15人制の場合は、遠征に行く時にスタッフも含め30名くらいで移動します。一方、セブンズは見ての通り7人で試合をします。登録されるのは7人+5人で12人まで登録されるのですが、実際に試合に出られるのは10人までです。なので、3人まで交代ができます。ですから、選手を大会に連れて行く時は、だいたい10人プラス1、2名連れて行きます。プラス、監督の私、コーチの岩淵、そしてトレーナーの1人。ですから13〜15名で遠征に行くことが多いです。それで毎日顔を合わせるの、ファミリーのようになります。

セブンズで僕がいま大事にしているのは、挨拶です。まず握手からコミュニケーションを取ることなのですが、私が実際フランスで2シーズン、ラグビーをする中で経験したのが、フランス人はまず握手して挨拶をするのです。フランスの場合、夕方ロッカールームで会って、20人いたとしても、1人1人の目を見て20人と挨拶をしなければいけないのです。これがすごく良いなと思って、私のカテゴリーの中では皆で握手するようにしています。

2つ目に **Discipline**。規律ですね。セブンズとは言え、日本代表なので、桜のマークが胸に付きます。日本代表のプライドを持って行動してもらいたいということと、やはり代表戦なので、相手をしっかりとリスペクトする。いくら試合で激しいプレーや、乱闘に近いプレーがあっても、ラグビーの場合ノーサイドと言って、試合が終わればそこでお互いのサイドがなくなるのです。そういった意味では、後まで遺恨を残さないというのが、ラグビーの良いところなのかなと思います。

セブンズゲームと15人制との違い。1つは、試合時間がすごく短いです。15人制は40分の前後半。ハーフタイムが10分あります。7人制の場合は、基本的に7分です。7分やって、ハーフタイムは1分ないし2分です。それで後半も7分。計15分くらいで行われます。ただし、予選リーグでは1日に3試合行われます。その翌日に決勝トーナメントが最低でも2試合行われるので、勝ったら次に行ける。負けたら敗者復活がある。負ければそこで終わりなのですが、勝てば3試合になるので、計6試合行うこととなります。唯一違うのが、リスタートと言って、トライした後、本来であればトライをされた側がキックをするのですが、セブンズの場合はトライをした方がまたキックをすることになります。そこが15人制と異なるところです。

私が監督として選手に言っているセブンズの3原則は、1つ目はアタック。本当にサポートが大事ということ。15人制の場合は、フォワードが8人、バックスが7人いるので、1回アタックすればボールを争奪するところでは10人くらいがボールを争奪している状態になるのですが、セブンズの場合は数が少ないので、2対2くらいでボールを争奪します。ですから、1歩でも早く行け

ばマイボールにできる。とにかく、アタックに関してはサポートが大事だと言うことです。

2つ目はディフェンス。あの広いグラウンドを7人で守らなければいけないので、スペースを広げていたら簡単に穴が出てしまう。ですから、ディフェンスはとにかくコンパクトにすることが大事なことになってきます。そして、セブンズにもセットプレーはあるのですが、キックオフをマイボールにすることによって試合が決まると言っても過言ではありません。キックオフをマイボールにすれば、ボールをつないでトライをするだけの実力を日本は持っています。ただし、このキックオフを取れないと、体力差・体格差・スピードというもので、日本が勝っているというところはほとんどありません。

3つ目はセットプレー。LOというのはラインアウトです。これを日本代表では大事にしています。15人制とは違って2～3人が並びます。とにかく相手のいない所に投げれば確実に取れます。実はラインアウトからのトライというのが、ペナルティにつぐトライの多さになっています。そしてスクラム。15人制では8対8で組むのですが、セブンズでは3対3で組みます。3対3だから大丈夫と思われがちですが、実はここにもたくさんの駆け引きありまして、かなり押しあったり引きあったりしています。日本が2年前まで弱かったのは、このキックオフとスクラムが全然取れなかったからです。マイボールにすら確保できないので、大量失点に繋がっていました。

セブンズとは言え、心技体が大事になります。やっぱり少ない人数でやるので、7人もしくはサブも含めて12人が心を1つにしていけないと、特に日本代表の場合は戦ってはいけません。技術については、皆世界に行くと自分の技術を知ることになります。日本では通用しても、世界のセブンズプレーヤーというのはとてつもなく速い選手や、体が大きい選手が多いので、タックルミスも15人制であればそれをカバーできるのですが、7人制の場合、そこで1人抜かれるとあっという間にトライまで持っていけません。そこで己を知ると、インディビジュアルトレーニング（個人練習）をどんどんするようになります。体については、フィットネスありきです。7人制の場合、フィットネスがないとやってはいけません。例えばいま、15人制の代表対7人制の代表が7人制の試合をしたとします。もちろんやったことはないのですが、僕は7人制の選手の方が15人制の選手より体力もあるし、やってみたら勝てると思っています。

また、セブンズの選手はものすごく考えてプレーします。もちろん15人制も同様なのですが、7人制の場合は世界を相手にしていて、日本人の良いところは知恵なんですね。ここは唯一世界に勝っているところだと思われるので、我々セブンズのメンバーは頭を使って勝とうということはかなりやっています。岩渕がコーチ兼アナリストとして、海外の試合のビデオを見て分析しては試合前に選手に見せるようにしているのですが、そこである程度ヤマをはってやっていくことによって、今年に入って世界の強豪国にも互角に戦えるようになってきました。

ゲームプランは”Simple is Best”です。たった15分しかないので、余計なサインプレーなどはありません。とにかくラグビーができて、ゲームフィットネスがあつてスピードで勝負する。もうこれだけなので、あまり余計なものは考えない。先ほど相手チームの分析などをやると話しましたが、ゲームプランについては、本当にシンプルにやっています。目標は2016年のオリンピック出場。もちろん、メダルの獲得も目標にしています。実は2016年の前の2013年に、オリンピック前最後のワールドカップ・セブンズ大会があります。もちろんここにも今まで5回連続で出場していますので、この大会が日本にとってワールドカップでは最後の大会になります。

オリンピックの種目になったということで、全世界にチャンスが広がります。例えば、日本は15人制では世界で13位まで上がって来ました。たぶん、これまでの最高位だと思います。今まで15～20位前後を行ったり来たりしていました。ただし、ここから上のトップ12チームにはなかなか入れません。ティア1と言われているのですが、1ランク上になります。日本はようやくティア2に入ってきたところですよ。

では、セブンズでは世界の中で何位くらいか。15位～20位前後です。ポイント制というのがあり

まして、日本ではこの10年、ポイントを全然取っていないのです。例えばケニア代表。15人制では43位です。7人制では去年6位です。あり得ないようなのですが、実は7人制の中では今こういう現象があります。日本はアジアでは1位です。ただし、世界で見るとまだ15~20位くらいです。

選手選考については、現在トップリーグを中心に選考しているのですが、なかなかベストメンバーが揃えられない状況が続いています。将来的にはセブンズアカデミー出身の選手を中心にしたいと考えていますが、あと6年くらいはトップリーグの選手に頼らざるを得ないでしょう。

選手選考の方法は15人制と違います。世界に通用する選手発掘ということで、先ほどアタック・ディフェンス・セットプレーと3要素をお話ししましたが、今セブンズではこういうことを意識しています。セレクション・ポリシーですが、15人制同様、まずディフェンス。タックルができる選手。これはもう絶対条件です。2番目に絶対的なスピードのある選手。体力がなくても100mを10秒台で走る選手がいたら、残り2分でこの選手を出せばトライできる可能性があるわけです。こういう選手は、実は今の日本代表にも1人います。3番目は、体格、体系、身体能力に優れている選手。ラグビー選手はアスリートですが、セブンズは世界同様、超がつくアスリートの集まりになっています。4番目は体幹が強くて、ハートの強い選手。セブンズの場合は、先ほども申しましたように1日に3試合、2日で6試合を行うことがあるので、たった1試合だけ良いプレーをしたのではだめです。6試合通してコンスタントに活躍できる選手を求めているため、最終的にハート、根性のある選手が残ってきます。

セブンズのトレーニング内容については、これは遠征中ですが、簡単なフィットネスメニューは毎回行います。コアトレ（村田スペシャル）とスライドにあります。実際大会がすぐ始まってしまいうので、だいたい遠征には1週間単位で行くのですが、期間中1回はコアトレと言ってウェイトによるサーキットトレーニングを入れています。練習は、遠征先に行くときだいたい16チーム集まっていますので、そのチームたちとコンタクトを取って、必ず練習試合を行うようにしています。とにかくライブで練習試合を行います。なぜかという、セブンズのメンバーは日本でなかなか召集できないことが多いので、いろいろな選手が大会の時に集まって来ます。初めてという選手がだいたい2~3人入ってきます。ですから経験値を上げるためにも必ず練習試合を行うようにします。

セブンズの絶対条件としては、やはりフィットネスがあること。身体能力、フィジカルスキルがあること。ここにタックルとブイクダウン・スキル。ブイクダウンというのは簡単に説明しますと、タックルが発生した時点で、その次のサポートプレイヤーのどちらかが先にボールを取るか（キープ）だと思っていただいて結構です。相撲でいう立ち合いです。立ち合いで負けないために相手より低く入って、そこを乗り越えてポジションを取らなければいけない。それと、キックオフの時にいかに高いボールをマイボールにキャッチできるか。マイボールにさえすれば日本は勝負できるので、こういうスキルのある選手は選ばれやすいです。セットプレーは、スクラム・ラインアウト・キックオフ。15人制もそうですが、7人制だとこれがさらに重要になってきます。1番下に個人ボールジャグリングスキルと書きましたが、いかにボールと友達になるか。フィジーの選手なんかは、下に落ちているボールを片手で持ちあげます。スピードをほとんど落とさずに片手で取ったり、足でチョンと蹴って持ち上げたりします。そういうスキルは個人練習してれば、かなり上達します。15人制ではこういう形でボールを取ったり、足を使うスキルはあまり好まれないのですが、7人制では重要なスキルになります。

セブンズでも年1回大きな合宿を行います。今回だと4月22~25日までナショナルトレーニングセンターで行いまして、25日には秩父宮ラグビー場で「セブンズフェスティバル2010 in Tokyo」という大会を行います。これは8年ぶりの大会ですが、トップリーグのチームに9チーム集まっていたかまして、それに加え、セブンズの選考中の選手40~50人リストアップしている中から3チーム作ってグループリーグとトーナメントに参加してセレクションマッチを行う予定です。

セブンズアカデミーというのも去年立ち上げまして、第1回目が11月、第2回目を昨月の2月に

行いました。

女子もオリンピック種目に選ばれているので、男女ともに強化していかなければいけません。実際、女子は前回の東アジア大会で準優勝しています。ただし、東アジア大会なのでレベルはかなり低いです。女子のアジアで1番強いのは中国。ダントツに強いです。世界でやっても、いま、中国は対等に戦っています。

先ほど男子も金メダルを取ったと言いましたが、予選で4勝1敗。決勝で香港に勝って優勝しましたが、4勝1敗の1敗というのは中国に負けました。場所は香港で行われて、2点差だったのですが、非常に興味深い試合でした。いま中国では、農業大学というところ1箇所、ラグビーができる選手を集めてものすごく強化していると聞いています。

その中国と戦ったのですが、10対12とトライ数は一緒だったのですが2点差で負けました。そういう競った試合をした日本も良くなかったのですが、3つほどジャッジに怪しいものがありました。1つは、セブンズの場合、トライした後にゴールキックを40秒以内に蹴らなければいけないというルールがあります。15人制は1分以内に蹴ればいいのですが、7人制は7分しかないので40秒以内に蹴らないといけないのです。それを40秒ギリギリに蹴って入ったのですが、タイムオーバーを取られました。2つ目は、残り1分を切ったところで、日本の選手がきれいにボールを回してフォワードの選手がトライをしました。これで逆転して、あと1分しかなかったので逃げ切れるかなと思ったのですが、サッカーでいう副審にあたるラインジャッジの方が旗を上げていました。何かと思ったら、「今のプレーはスローフォワードだったよ」主審に申告して、トライが無効になりました。あともう1つありました。セブンズは電光掲示板で残り時間が表示されているのですが、それが残り14秒になった時に、試合終了を告げるフォーンが会場に鳴り響きました。14秒残っているのにフォーンが鳴るということはありませんが、フォーンが鳴った瞬間にタイム表示が消えてノーサイドになりました。アウェーでは、そういう信じられないようなことが起こるんです。最終的に香港に勝って金メダルが取れたので良かったのですが、ああいう時には、ダントツに勝てないといけないなと思いました。

ここで映像を見ていただこうと思います。去年ワールドカップに出た時にプロモーションビデオを作りました。選手を鼓舞したり、今までの選手のがんばりを映像に残して、それを見てワールドカップに向けてがんばろうというビデオを、岩淵コーチに作って頂きました。

<2009年ワールドカップ前 プロモーションビデオ上映>

■映像を見ながらのコメント

- ・これは2年前の映像ですが、この時香港にはじめて負けた試合です。
- ・これはアデレード大会ですね。サモアに残り14秒まで勝っていましたが、最後に逆転されてしまいました。
- ・これはウェールズです。ウェールズはワールドカップで優勝したチームですが、このチームにも、終盤同点も1トライ差で負けました。
- ・ワールドカップとは言え、レギュラークラスは半分くらいしかいませんでした。
- ・ボウルが3位グループ、プレートが2位グループ、カップが1位グループと分かれます。
- ・セブンズは日本代表への登竜門のようになっています。これは今も昔も変わりません。
- ・これは世界ランク1位のサモアですね。
- ・この選手は横山選手と言って、リコーで双子のプレーヤーです。足は速いのですが、ディフェンスが苦手な選手です。
- ・このようにラインアウトは2人で1人をリフトをします。

- ・彼がソという在日の選手ですが、彼は体重が 95kg もあるのに 100m を 10 秒台で走れる選手です。
- ・これはサンディエゴ大会ですね。
- ・この末松選手。足は速いのですが、ホンダでは公式戦未出場でした。
- ・このようにパスをつないで、グラウンドを広く使います。
- ・これはケニアで行われた大会です。最後にケニアの B チームと戦ったのですが、最後にサドンデスで代わったばかりの徐選手が 1 人でトライまで持っていき初めて優勝することができました。
- ・同じく 2 年前に僕が監督としてケニアで初優勝した時の映像です。皆ガッツポーズしているのですが、疲れすぎてみんな徐選手のところまで集まらないのです。
- ・これがワールドカップ出場を決めた時の香港戦です。ここではまだ負けているのですが、ここから 1 人の選手が 100m 走って逆転トライを決めて見せます。

<ディスカッション I >

中塚：日本の選手のことはわかったんですが、海外の選手も、普段は 15 人制をやっている人の中からピックアップされているんですか？

村田：そうですね。7 人制に特化しているチームは世界でも少ないのですが、例えばケニア代表は今から 9 年前に強化を始め、4 年前からは、7 人制の選手とはケニアラグビーユニオンとでプロ契約をしています。ですので、彼らは 8 年間くらい同じメンバーでやっていると聞きました。去年は世界で 6 位。ニュージーランドにも去年 2 回勝っています。ニュージーランドはいま、世界で基本的にはダントツに強いんです。でも、ワールドカップになるとウェールズが優勝してアルゼンチンが準優勝だったように、セブンズってその時のチーム状況で結果がころっとひっくり返ったりします。I R B のワールドセブンスシリーズは今年でちょうど 11 年目に入りますが、ニュージーランドはこれまでに 8 回優勝しています。去年は南アフリカが初めて優勝しました。今年も既に 6 大会終わったのですが、始めの 2 大会はニュージーランドが勝って、3 大会目はフィジー。4～6 大会目はサモアが 3 連覇している状況です。これはポイント制になっています。サモアも 7 人制は 7 人制で同じメンバーで構成されていますし、フィジーもだいたい 20 人のスコッドというのを作りまして、1 年間は毎回その中から 12 人が大会に参加してきます。ニュージーランドも同様です。

中塚：そのスコッドに選ばれた選手は、その年は 15 人制には出ないんですか？

村田：15 人制にも出ています。両方やっているのですが、大会期間中は基本的に、無条件に 7 人制に出場することになっています。日本もそのようにしたいのですが。日本の場合は企業スポーツなので、そこで話し合いをしていかないと、前回の東アジア大会のようにトップリーグと重なったら、どうしても自分のチームが勝つことを優先して、選手を出して頂けません。そこは、僕の個人的な監督とのつながりだったり、上の方から言って頂いたり、そのようなことをして出してもらおうということが起きています。

もう 1 つお話ししますと、I R B のワールドセブンスシリーズは、今年で丸 10 年になりますが、これは半年かけて 8 大会行われています。12 月から 6 月までの半年間、8 ヶ国で 8 大会が行われるのですが、2 大会ずつがセットになっています。12 月の大会がドバイと南アフリカで 2 週連続です。2 月にニュージーランドと、今回だとラスベガス。3 月末はオーストラリアのアデレードと香港。5 月末から 6 月に行われるのは、スコットランドとイングランド。コアチームと言われる 12 チームは全大会に招待されます。香港大会以外は 16 チームで行うので、コアチーム 12 チーム

ムに加えて近隣諸国4チームが入って行われます。日本は今ランク12位に入っていないので、現在招待されている国がアメリカと、日豪友好関係があるオーストラリア。香港だけは24チームが参加できるので、香港にはアジアの6チームが参加しています。その3大会しか、日本はいま出場できない状態です。このままではどんどん世界との差が広がるので、ここも改善していかなければいけないという動きもいま出ています。

高橋：13位以下は成長させないというようなIRBの保守的なところがあるわけですね。その差別的な制度に日本ははめられてしまっていて、試合に招待されないからポイントも稼げないし順位も上げられない。オリンピックもおそらくこれにはめられると、出られない可能性も出てきますよね。

村田：それも当然出てきますし、もう1つ言うと、おとしカナダが12チームに入っていましたが、アメリカがポイントを上げたので、去年、アメリカとカナダが入れ替わりました。

そして去年の大会での最下位はフランスで、ポルトガルの方が12位以内に入ってポイントは取ったのですが、フランスは今年もなぜか残り、ポルトガルは入れない。どういった政治的圧力があるのか。

高橋：ルールを越えた政治があるということですね。

村田：ここは私と岩淵コーチが頭を痛めているところです。なんとかいま3大会に入れるようになってきていますので、大会に行った時に私と岩淵コーチでたくさんのラグビー関係者に会うようにして、「日本を呼んで下さい！」と呼びかけています。来年はニュージーランドにも呼ばれる可能性がありますし、ドバイも、アジア圏内ということで、日本もそこに入っているんじゃないかという打診をしています。やはり日本はポイントを取っていかなければいけないので。現実には日本と世界との実力差は縮まってきていると思われま。

牛木：そういう大会に参加する時の費用はどうされているんですか？

村田：招待された時に、交通費は全部IRBに持っていただいています。ホテルなどはその国が持つと思われま。実は2002年まで日本でもそういった大会を行っていましたが、億単位で赤字になるので採算が取れないそうです。IRBに払わなければいけないお金もあります。IRBからデポジットを取られるようです。

牛木：そうすると15人制の今度のワールドカップと同じですね。

村田：そうですね。ですから苦渋の選択で、日本ではやらなくなったというのが現状です。ラグビーはヨーロッパ中心なので、日本には厳しい部分がたくさんあります。いま岩淵コーチは、日本協会ではハイパフォーマンス・マネージャーとして世界を飛び回っています。彼にはバックグラウンドがいっぱいありまして、ケンブリッジ大学を出ているというのは、やはりIRBに対しても大きなインパクトがあり、将来彼が日本を担うリーダーになっていくかと思いま。

<ワールドカップアメリカ大会 日本対アルゼンチン 上映>

村田：アメリカ大会では、2勝したんです。予選初戦でアルゼンチン代表に7-0で勝ちました。ア

ルゼンチン代表は15人制では到底勝てない現在世界3位のチームで、7人制でもワールドカップで準優勝したチームです。なんで勝ったんだろうかということでそのゲームを見てみたいと思います。

■映像を見ながらのコメント

- ・ラスベガスのスタジアムに初めて行きましたが、周りは全て砂漠なんですね。
- ・7人制の大会にはコスプレが有名です。香港大会では3割くらいがコスプレで応援しています。
- ・試合と試合の間は2～3時間くらい空きます。
- ・アルゼンチンは日本相手なのでこの位置（自陣インゴールエリア）からも回ってきます。
- ・ボールごと抱えられると日本は弱いですね。
- ・7分って結構長いんですね。陸上で言うと、2000m走を前後半続けて走るような感じですね。
- ・3人まで交代OKです。交代の時はプレーと時間を止めます。この試合は拮抗していたので、選手交代はしませんでした。
- ・ハーフタイムは2分間で、皆酸欠状態で、話しても分からないので、私は一言しか言いません。
- ・アジアの大会では、私や岩淵コーチも選手登録することがあります。
- ・日本はタイムマネジメントを良く考えています。まともに戦うと点を取られるので、有効に時間を使うようにします。この時は、とにかくリスタートをゆっくりするように言いました。
- ・15人制ではボックスをやっている選手が多いです。ラインアウトもスクラムも基本的にはフォワードの技術なので、そこは徹底的に教えます。ですから、リフティングもうまくなります。
- ・だいたい日本はラスト1分で点を取られて負けるというのがいつものパターン。最後まで勝敗が分かりません。

<ディスカッションⅡ>

阿部：村田さんは15人制と7人制を両方やられていましたが、別のスポーツという意識だったんでしょうか？

村田：別のスポーツになりますね。同じラグビーなので共通する部分もあるのですが。例えばアタックだったら、以前のセブンズであればボールをただ後ろに回したりして様子を伺う時間がありますが、今のセブンズは、ご覧いただいた通り、常に攻め上がるしかないんですね。攻めて、ブレイクダウンを獲得して、また攻める。そういうことをやっていかないと相手が一気に詰めてきます。この試合では、アルゼンチンがそこまで上がってこなかったのも、日本は攻めやすかったのですが。

牛木：将来的に15人制と7人制は別のスポーツとして発展するかどうか。子どもの時に15人制をやっていて大人になってから7人制をやる。もしくはその逆はあり得るのかについてはどのようなお考えですか？

村田：両方あり得ますね。セブンズがオリンピック種目になったことで、セブンズのいろいろなチームができるかもしれません。実際、15人集まらないチームはセブンズからしか始められませんし、セブンズは7人集まればそこで試合ができるわけですから。危険性も15人制ほどありません。セブンズは1対1になるので、怪我も少なくなるのかなと思います。ただし、15人制でやっていたからこそセブンズで活かせるプレーもたくさんあります。7人制だけやっても伸びしろは少ないんじゃないか。15人制があるからこそ7人制でこれだけプレーできるのかなとも思います。

高橋：例えば、それはどのようなプレーですか？

村田：例えば、ブレイクダウンというのはフォワードだけでなくバックスも皆できなければいけない技術です。これが学生レベルだと、バックスはあまりブレイクダウンスキルというのをやりません。だから、ボール争奪戦の時に見てしまいます。社会人は、そこでボールを確保しなければいけないので、タックルした後にそれを乗り越えていくという動きまでが一連なのですが、学生だとタックルして安心してしまいます。

高橋：逆に、セブンズを小・中・高とやった方が、15人制にとって役に立つということですか？

村田：役に立ちますね。スキルの面に関してはセブンズの方が長いパスを投げなければいけないし、走らなければいけないので。

高橋：逆に言うと、そういう場面では15人制をやっているとセブンズが伸びないということですか？

村田：例えば、これおもしろい話で、15人制で代表になるとセブンズの代表に行きたくなることもあります。もう二度とあんなきついことをしたくないと。ただ、日本が勝っていくためにはフィットネスを世界一のレベルにまで上げていかないと到底世界には勝てないので、まずはそこからなんですね。本当は、日本は極力接触を避けたい。接触するとボールを持って行かれるので。アルゼンチンがそこまで絡んでこなかったのでもこういう試合になりましたけど、例えばサモアやニュージーランドと試合をすると、確実にホールドされて、簡単にボールをもぎ取られます。いまアルゼンチンには勝ちましたが、イングランドには40点取られて大敗しています。ティア2の国とやるとクロスゲームができるようになってきたレベルです。ただし、ニュージーランド、サモア、イングランド、フィジーの4チームとはまだまだ差があるのが現状です。

牛木：上のチームとの1番大きな差は何ですか？

村田：簡単に言うとフィジカルが全然違います。日本人と体の厚みが全然違います。

牛木：先ほど「体系」と書かれていたんですが、これはどういう意味でしょうか？

村田：日本人も最近大きくはなってきたんですが、外国の選手は大きくかつ俊敏性があります。日本人の場合、大きくなればなるほど俊敏性が劣っていく。そういう意味で体系なんです。大きくても俊敏性のある選手が7人制では活躍できる。

牛木：いま見ていると、体格も大きい方がいいし、遅筋よりも速筋の方が大切かなと思うのですが、そうすると日本人にはあまり向いていないかと思います。15人制と同じように、7人制も日本がトップの方に行くのは難しいかなと感じたのですがいかがでしょうか。

村田：おっしゃる通りで、7人制の方が勝てないのではないかと言う方もおられるんですよ。ただ、番狂わせが起きやすいのは7人制なんですよ。なぜかと言うと、15分で終わるからです。時間の使い方が本当に大事になってきます。アジアの中では体格的にも勝っていてマイボールにしていけるんですが、世界だと乗っかっていけないんですよ。だから、スタミナ勝負というよりも、

時間を有効に使って、日本流というか、刀だと切れ味で勝負するようなところに最終的になっていきます。

嶋崎：今の牛木さんのご意見に対してなんですが、7人制の方が戦い方があると思うんです。15人制はもういろいろな戦い方ができないんですが、7人制の方が極端な戦い方ができる。できるだけコンタクトを避けて、ラインアウトの技術だけ磨いて、パパパッと回して点を取ったらあとはできるだけ我慢して我慢して我慢して時間を経過させていく。だから日本が勝つためにはロースコアだと思うんですね。それが15人制ではできないと思うんですね。7人制の場合はスペースがたくさんあるので、極端な戦い方ができるという点で、日本にはまだ勝機があるのかと思います。

牛木：そうすると、7人制の方が日本が勝つのは難しいという意見と、7人制の方が勝機があるという意見の2種類があるわけですね。

村田：ありますね。

嶋崎：ただまともな戦い方をしたら全く勝てないと思いますね。ニュージーランドと同じ戦い方をしたら7人制ではまったく勝てない。だけれども、違う戦い方ができる可能性がある。逆に言うと15人制のジャパンではニュージーランドと同じような戦い方をしている訳ですよ。その辺が違うんじゃないかと思います。

高田：今後、国体など下のカテゴリーで7人制の普及をする時に、他の種目の選手が7人制ラグビーに来る可能性はあると思いますか？ サッカーでも、世界的にコーディネーション能力がものすごく注目されていて、先日イタリアに行って来たんですが、180cmくらいの選手がものすごく細かいステップで動いて、体が大きい分フェイク1つでも相手が騙されてしまう。日本にはあまりそういう選手はいない。日本だと、大きい選手は俊敏性が弱くて、頭で競るしかないというイメージがあるかと思います。先ほど映像を見ていても、ステップの早い選手とかはラグビーだけでなく他の種目もやってコーディネーション能力を上げているのかと思ったのですが、日本だとそのような考え方はあるんでしょうか。

村田：3年後、6年後は、特に男子に関しては、ラグビー経験者がメインになってやっていけると思います。ただし女子に関しては、現存のメンバーだとオリンピックは正直厳しいかもしれません。実際、先日の第2回セブンズアカデミーでは女子も全国から呼んで行いましたが、一人陸上の選手がいて、100mを12秒前半で走る選手がいましたが、1人だけ圧倒的なスピードでした。そういう選手はありだなと思います。例えば柔道で芽が出ない選手がラグビー界に来るのもありですし、もしかしたらバレーボールやっている選手は身体能力高いですから、そういう選手にラグビーをやっていただくと、6年後のオリンピックから十分チャンスがある。中国はそういうことを今やっていますしね。農業大にラグビー選手を全員集めて強化している。実際、中国の代表は185cm以上の選手がほとんどでしたしね。これは、6年後をしっかりと見据えて強化を始めたんだなと思いました。

男子については、この10年、15人制日本代表がニュージーランド代表と戦うと、50回やっても勝てない可能性があります。7人制ですと、50回やれば5回～10回位勝てるのではないかと思います。実際、4年前にニュージーランドと対戦した時は、残り10秒まで勝っていた試合もありました。残り10秒で持っていかれるという試合が、私が監督になってからも何回かあるんですよ。最後の最後に踏ん張れないとかね。今回の香港セブンズでは、4試合しか戦えなかったん

ですが、ウェールズ・スコットランドとはトライ数が一緒で、両方とも 10 対 12 というゴール差で負けているんですね。イングランドには 40 点差くらいつけられたんですが、そのくらいボールを取れないとどんどん点を取られるのがセブンズです。今は日本がボールを取れるようになってるので、クロスゲームができています。ここで良い試合できたなという試合をもう 1 試合見ていただきたいなと思います。

<香港セブンズ大会 日本対スコットランド 上映>

■映像を見ながらのコメント

- ・スコットランド代表に惜しくも負けた試合です。この大会は有名な大会で、3 日間でのべ 10 万人（今期は 11 万人）が来るイベントです。メンバーは前回のラスベガスで勝った時から残っているのは 5 人だけです。香港の時は日本のシーズンが終わっているんで、ある程度良い選手が呼べます
- ・アリシ・トゥップアイレイ選手というのは去年からセブンズの代表に呼んでいる選手で、去年の秋には 15 人制の日本代表になりました。もともとサモア出身で、ニュージーランドでラグビーをやっていて、8 年前にホンダヒートというチームで日本に来ています。
- ・審判は 15 人制と 7 人制の両方をやられている方が多いです。でも、基本的には 7 人制をメインにやっている審判が多いです。レフェリーも追いつかないので、トライする先に、インゴールジャッジという審判がいます。それだけ攻守の交代が早いんですね。
- ・この北川選手はもともと 15 人制でも代表だったんですが、三洋電機で 3 年連続トライ王になっています。7 人制だとディフェンスが苦手なんですよ。15 人制で活躍できても、7 人制で活躍できるとは限りません。
- ・スコットランドはキックオフも高くて良いところに蹴るんですよ。
- ・この築城選手は約半年ぶりにセブンズに戻ってきたセブンズジャパンの主将です。
- ・ミスが続くと相手にチャンスを与え続けてしまいます。
- ・スコットランドがミスをしているのですが日本もミスしてのっていけないんですよ。
- ・これは 2 日目の第 1 試合です。10 時半くらいの試合です。
- ・試合の間はリカバリーフードを食べたり、アイスバスに入ったりトレーナーの指示で過ごしています。食事は I R B でも用意していますが、日本は現地でおにぎりを作ってもらって常時用意するようにしています。
- ・（映像でフィールド中央に見える）広告は映像だけでなく、フィールドに書かれていますね。
- ・この香港大会には 300 人くらいの日本の応援の方が来ていました。着物を着た方もいました。
- ・当日券は完売ではありません。
- ・香港セブンズは 1976 年にスタート、今年で 35 回大会くらいですね。
- ・裏を取りに行くのは選手たちの判断です。
- ・この日、100m を 10 秒で走る徐吉嶺選手は肉離れで出場できませんでした。
- ・ハーフタイムの私のコメントは「シンプルにやろう」の一言ですね。
- ・日本ラグビー協会の方々人も遊びに来ていました。
- ・クイックは OK です。しかし日本の場合、クイックで攻撃すると墓穴を掘るので時間（タイムマネジメント）をかけてラインアウトを選択します。
- ・イエローカードは、15 人制の場合 10 分退場ですが、7 人制では 2 分間です。
- ・タックルが弱いんですね。
- ・ここも 1 対 1 ですが、簡単に抜かれてしまいます。和田選手がカバーに行ったんですけどね。
- ・ここで点を取りに行かなければいけないので、成田選手という、アタックに秀でる選手でとても良

い動きをする選手を入れました。成田選手が入ってアタックにリズムができてきました。

- ・このキックが入ったら同点だったんですが、バーにあたってしまいました。
- ・このレフェリーとも、正直、相性がよくなかったです。レフェリーについては大会を通して各国から文句が出ています。日本人のレフェリーも2人います。今回1人カナダのレフェリーに対して、納得がいかないジャッジがあったので、岩淵コーチが抜粋したジャッジシーンを作って丁寧に確認をするような形で、レフェリーの良かったところの確認を入れて、あえてミスのところを入れないで聞いたところ、レフェリーの方から、実は日本戦で2つミスジャッジをしたと言ってくれました。ここで良いコミュニケーションが取れたので、その後香港とやった時にそのレフェリーだったのですが、見違えるようにレフェリングが向上していました。

<ディスカッションⅢ>

嶋崎：レフェリーをいかに味方につけるかですよ。

阿部：明日、江戸川陸上競技場で行う高校生のセブンズの大会には嶋崎さんも行かれるんですか。

嶋崎：昔、ジャパンセブンズをやっていた頃は、高校セブンズという全国大会も行われていましたが、今は北海道、東北、関東など9地区の15人に満たない部活動でやっている子たちを集めた選抜チームを作って普及的な意味合いの強い大会になっています。

鈴木：先ほど選手の選抜の段階でご苦労があるというお話しを伺いましたが、いまトップの選手たちのセブンズに対するステータス観はどのようなものなのでしょうか。

村田：呼んだ選手は、今後も呼んでほしいということで、とても日本のために戦ってくれます。いま、26歳以下の若い選手を選んでいますが。しかし26歳以下で、先に15人制で日本代表に入った選手たちは、セブンズを軽視する傾向があります。15人制代表だと出向扱いになってお金も出ます。でも、セブンズはいま、ボランティアでやってもらっています。選手としても海外が経験できる良い機会なので、チームからセブンズに行くと良くなったと言われることが8～9割です。しかし、中には怪我をして帰すこともあります。そんな時に、私の大先輩でもあるコカ・コーラの向井昭吾監督からは、毎回色々とアドバイスを頂きます。1番選手を多く出してくれるのもコカ・コーラです。

鈴木：アカデミーのお話しはありましたが、今後普及の面ではどのようなことをなさろうとされているのでしょうか。

村田：これは私よりも岩淵ハイパフォーマンス・マネージャーが全国を渡り歩いて調整していますが、私が思うことは、オリンピック種目にもなったので、私や現場がどんどん全国に出向いて普及活動をしていかなければいけないだろうと思っています。加えて、現在7人制の監督がほとんどいないので、セブンズの指導ができる人を増やしていかなければいけないと思っています。実際、15人制に比べて、セブンズの方が全然予算がありません。だから、本当は遠征の前に強化合宿やセレクションゲームを行いたいのですが、遠征先の3～4日間でチームを作って大会に出るというのが現状です。この辺を改善していければ、代表には力のある選手を呼んでいるので、もっとできると思います。いまはディフェンスに時間をかけていて、アタックの練習はほとんどやっていません。ほとんどやっていないのにこれだけ成果が出ているということは、1年間の中で7割くらい同じメンバーでツアーに参加していたのが今年の強みだったのかなと思います。

オリンピックが始まったことによって、これまでの8大会に加えて、昨年からアジアシリーズというのが新設されて、6ヶ国6大会。5回の合宿よりも1～2回大会に出た方が絶対選手は伸びると思います。昨年は11ヶ国11大会に出ました。今年はそこまではできないと思いますが7～8大会に出る予定です。練習するよりも試合することが1番の経験になるので、そこはどんどん経験していきたいなと思っています。その反面、15人で行くと200～300万かかりますが、遠方ケニアよりもっと近くで大会があり、合宿に良いところがあればそこに行きたいとも思っています。

鈴木：かつてジャパンセブンズがあった頃は7人制の大会が今よりもあったと思うのですが、いま、認知度が落ちていることについて、例えば国体に入れるなどという話もありますが、どのようにお考えでしょうか。

村田：国体については、専務理事とかが国体も7人制にすればいいんだとかいうことを言っていますが、実際にできるのは5年後とか言われています。準備することが多々ありすぎてそう簡単にできないだろうと言われていています。一方、既存のYC&AC大会は52回大会。長年行われている大会も多くあります。特に春のシーズンにはいろいろなところで大会が行われていますね。既存のものをもっと盛り上げて、実は4月25日に「セブンズフェスティバルイン東京」という大会を行うのですが、まずは日本での大会を増やしてメディアを通して情報を発信していく。もっと大事なのは日本ラグビー全体を盛り上げるためにも、代表はもちろんですが、関係者の方々にはセブンズも率先して大会やイベントを見に来て頂きたいと思っています。しかし、現在私たちがやりたいと思っ

ていることが少しずつですが、形になってきていると実感しています。

この先の話は次の場所で追ってさせていただければと思います。

高橋：それだは続きは場所を変えてといことで、今日はお忙しい中ありがとうございました。